

学生一人ひとりの名前を覚える！

大 石 祐 一

1 はじめに

この原稿を書くころというのは、運動会がそこかしこで始まるころである。うちの子供からも運動会で行う徒競走の練習で「今日は1番だった」とか「今日はだめだった」などと夕食をとりながら聞く。

最近の運動会では着順を決めないそうだ。差別をしないためだろうか、教育は公平とかいう理由でなのだろうか。通信簿が無い学校とか、数字で評価をしない学校（実は私の小学校も○か×だった）もある。ゆとりの教育のためだろうか。私が子供の頃は受験戦争といって教育がおかしくなり始めた頃だと思うが、この頃はさらにおかしくなってきたと思う。今回、『中部大学教育研究』No. 4に書かせていただく機会をいただいたが、本エッセイを、教育に携わってまだ6年程度の若年者の虚言だと思って読んでいただければ幸いである。

2 運動会と教育

先の話にもどすが、運動会などで着順を決めないのは、私には納得できない。1番になりたいから、みんな一生懸命走るのではないだろうか。体育が苦手な生徒は他の科目で頑張ればよい。さまざまな生徒がさまざまな行事や授業で一番を目指して頑張ればよい。それが、他の生徒に対しても頑張らせる動機となるのではないだろうか。

また、先生が着順を決めないでなんでも「みんな、よく頑張ったね」でよいのだろうか。それは、生徒の身になっているのだろうか。生徒は、自分が何番だったか知っているし、あの子に負けた、あの子に勝ったということで次回にどうしようかと色々と考えているのではないだろうか。「みんな頑張ったね」は、生徒を「集団」として試みているのであって、「1番」、「2番」あるいは「最下位」というのは生徒を一人ひとりとして見ているとも言える。一人ひとりを認識した考え方をさらに取りいれてもと思う。

3 高校と予備校

私は、前の大学で助手をやっていた頃、教授に、「悪問だらけの大学入試／河合塾から見えること」を読んでごらんといわれた。その中には、以前の高校と予備校の立場が現在では逆転したという内容があった。以前は、理科においては、高校はさまざまな自然の原理を基礎からきちんと教える立場だった。一方、予備校は、原理から出された公式を生徒に色々工夫して覚えこませる立場だった。しかし、現在は、高校は何人大学に進学させたか、何人、偏差値〇〇の大学に入れたかに目がいて、原理を基礎から教えなくなったそうだ。その結果、高校では、公式のみ教えて覚えこませるようになったらしい。一方、予備校は、この現象に危機感を覚えて基礎から原理を教

えることになった。生徒にしてみれば、公式を覚えれば、点数が取れるわけだから、公式がでてくるまでの経緯を理解しなくてもよく、楽である。私も高校時代はそうだったかもしれない。

でも、企業の研究員、大学教員をやっている、公式をだすまでの経緯、また、その考え方が如何に大事か、そして高校、大学、大学院で考える訓練を受けていたことを痛感した。

大学に進学してくる学生にとって、公式を覚えてくるだけの教育を受けている学生は非常に大学での講義は苦痛であろう。そして諦めてしまうであろう。

そんな中、私は何をしなくてはならないのだろうかと自分に問うことが多くなった。

4 資格と就職

もう1つ気になっていることがある。どの大学でも同様であろうが、就職が良くなるから資格を取りたいという学生が多くなった。必要な資格は学生時代から勉強して取得すればよい。ただ、就職のためだけにとるとするのは如何なものか。学生としては、履歴書にそのような項目がある以上、何かやった方がよいと考えるのは当然かもしれない。教育の場にいる人間として、私は面接も教育のひとつと考えている。そして履歴書による就職希望者の絞込みはマンツーマンではないが、面接はまさに個々への教育となる。就職先の人事採用の方には、大変ではあるが、全員と面接していただき、履歴書記載の資格を面接における題材として使用していただきたいと思う。資格を取るための勉強がどうだったのかとか、試験はどうだったのかなどと質問しながら、本人の良さを判断していただきたい。

また、私は、学生に「資格が取りたいのな

ら、本気で勉強しなくては取得できないような資格を取りなさい」と指導している。そのような資格なら就職に有利になるかもしれないと思うからである。そうでない資格は、会社に入ったときに必要なら上司から「取得するように勉強してくれ」と言われるはずである。

資格は、決して就職する際に必要なものではないはずだ。学生も大学4年間で就職先から是非欲しいと言われるよう、時間を有効に使おう。本を読んだり、クラブに打ち込んだり、研究に集中したり、4年間は十分な時間だと思う。

5 「なぜ?」、「どうして?」

私は、今年から卒論生を持った。私は持つときに自分なりに彼らにどのように接するか考えた。それは、彼らに実験データなり、彼らの行動に対して必ず、「なぜ?」、「どうして?」と質問しようということである。彼らには苦しい質問であると思う。でも、実験方法にも実験結果にも必ず、そのような結果がでた理由があるはずで、彼らがなぜそのような操作をしたか、自分なりに考えさせたいのである。それが、これからの彼らに絶対に役立つと私は確信する。これが、高校時代に公式だけ覚えて、その導き方について勉強しなかった学生に対する良い指導だと私は考える。

さらに、4年生だけでなく、学生実験などの時間にも、なるべく「一人ひとりの学生に対して」ということを考えてやっていきたい。

6 南先生への返答

『中部大学教育研究』の、2002年発行 No. 2 pp. 252~257 に南基泰先生のエッセイがある。そこに登場する大石とはこの私のことである。南先生と私は、学科が違うが、応用生物学部

開設当初から、学生の件で喧々諤諤討論している仲である。成績の評価の方法、勉強しない学生にどうすれば学問に興味を持ってもらえるかなど、この4年間まじめな話から冗談まで、ほとんど毎日話してきた。

「いとおしくそつたれども」と思っている1期生も4年生で、本稿を書いている数ヶ月先には卒業である。南先生と私の自慢は、1期生の8割以上の学生の顔と名前が一致することである。南先生が書いているように、我々は、彼らの名前を覚え、我々が「学生たち」ではなく、一人ひとりの人間として接していることをあらわそうとした。このことは非常に大事であると思う。前項で記したように学

生に「なぜ？」、「どうして？」と繰り返し聞くこととともに、彼らに教員が自分のことを認識していることをきちんと理解させ、大学生活4年間で充実したものとし、成長できるようにしてあげたい。

20世紀後半から、企業は消費者に対して、「集団」としてではなく、「お客様一人ひとりへ」という考え方になっている。教育も、集団への教育ではなく、個々への教育にさらに変化していくのだと思う。その考え方の現れの一つとして、一人ひとり学生の名前を覚えているつもりである。今後も南先生、頑張りましょうね！！

(助教授 応用生物学部 応用生物化学科)